奈良・東大寺仏餉屋下層遺構

1　所在地　奈良市雑司町
2　調査期間　一九八三年（昭58）七月～一〇月
3　発掘機関　奈良県立橿原考古学研究所
4　調査担当者　中井一夫
5　遺跡の種類　寺院
6　遺跡の年代　八～九世紀
7　遺跡及び木簡出土遺構の概要

広大な寺域をもつ東大寺の東端に所在する二月堂は、毎年三月に行われるお水取の行事でよく知られているが、この行事に関連する建築物が他にも多くあることはあまり知られていない。仏餉屋はこの行事を取り行う僧集団（練行衆）の食事をつくるための建物で、二月堂に登る長い石段の下に所在する。鎌倉時代に建築されたと考えられる現在の建物は、重要文化財に指定さ

（奈良）

れており、これの解体修理が四月から行われていた。この解体修理に伴う礎石の除去・下部の調査により、掘立柱の検出・多量の遺物の出土等があり、七月から奈良県立橿原考古学研究所が、これの下部調査を行うこととなった。

調査により検出された遺構には、掘立柱建物二・礎石建物一・道路一・溝一がある。これらには時間的な差があり、Ⅰ期～Ⅲ期に大別でき、Ⅰ期はさらに二つの小期に分けることができた。

Ⅰ期（古）は、基壇状の石垣をもった掘立柱建物であったと思われ、これの建物の東南隅部の柱の掘形の中より和同開珎の銀銭を半裁したものが出土した。建物の周辺は自然地形に近い姿のままであったろうと思われる。Ⅰ期（新）は、基壇状の石垣の外側にもうひとつの石垣をつくりこれを溝とし、これより南側を道路としている。道路には大きな石が敷きつめられていた。道路は谷地形部を一部削り、一部埋めてつくられており、この谷を埋めた土の中より奈良時代後半の土器や、緑釉瓦片が出土している。溝内には黒色土器が多量に入っており、その廃棄の時期を知ることができた。木簡（桧扇）は、この溝内に転落した石と溝底にはさまれた状態で出土した。建物は東西棟で三間以上、南北は二間である。柱の直径は約四〇㎝であった。床の存在を示す柱もあった。Ⅱ期の建物は南北棟で二間×三間であったが、建物中央に竈があり、現仏餉屋と同様の目的をもった建物であった可能性の強いことを示している。Ⅰ期の建物に関して

は、その上限を八世紀前半に求めることができ、東大寺の前身としての金鐘寺に関連するものであると考えられる。

他にⅠ期(新)に属すると考えられる土層中からは「東寺」「造寺」「上院」「大同」等の墨書のある土器が出土している。

8　木簡の釈文・内容

(1)　×之×　(108)×20×1　061

(中井一夫)

兵庫県・山垣遺跡の発掘調査概報

第五回木簡学会の研究報告で関心を集め、本誌にも紹介されている山垣遺跡の発掘調査概報が刊行された。八世紀初頭に遡る里に関連した役所の可能性がある遺跡で注目されるが、概報では遺跡・遺物の詳しい解説の他、木簡全点の釈文と写真が掲載されており有益である。

兵庫県教育委員会発行

『山垣遺跡(近畿自動車道関係埋蔵文化財発掘調査概報)』

(B五版　三〇頁　一九八四年三月刊)

奈良・藤原宮跡

1　所在地　奈良県橿原市縄手町・飛騨町

2　調査期間　西面中門地域　一九八三年(昭58)八月～一二月、宮南面外周帯地域　一九八三年八月～九月

3　発掘機関　奈良国立文化財研究所飛鳥藤原宮跡発掘調査部

4　調査担当者　狩野　久

5　遺跡の種類　宮殿・官衙跡

6　遺跡の年代　七世紀末～八世紀初頭

7　遺跡及び木簡出土遺構の概要

一　西面中門地域(第三七次調査)

当調査は宮の西面で、宮の東西中軸線上の西面中門推定地で行った。面積は一〇〇八㎡である。

検出した主な遺構は、西面大垣・外濠で、予想された西面中門は後世の削平をうけて検出できなかった。その他には藤原宮期以後の井戸や土壙がある。木簡は外濠から二点出土した。

大垣は調査区南端で四間分の柱掘形を検出した。その規模は、掘形の一辺が一・五m、柱間は二・六六m(九尺)等間で、従来の大垣の所見と一致する。西面中門は検出できなかったが、大垣の柱掘形がとぎれる所から北が中門跡と考えることができる。宮の中軸線と